地方創生　第29回

第２期江差町まち・ひと・しごと創生総合戦略

江差町役場まちづくり推進課

１　はじめに

江差町は、北海道の南西部、檜山振興局管内の南部に位置し、総面積は109.53㎢、Ｂ型の形をした町です。北は乙部町、東は厚沢部町、南は上ノ国町と隣接し、また北西には日本海を挟んで奥尻町と対しています。気候は、対馬暖流の影響を受け、北海道の中では温暖な地域ですが、冬季は北西から季節風が強く吹き、特に２月頃に吹く厳しい季節風を「たば風」と呼びます。

江戸時代にはニシンの繁栄に支えられ、「江差の五月は江戸にもない」と謳（うた）われたほど繁華な様でした。「江差追分」や「姥神大神宮渡御祭（うばがみだいじんぐうとぎょさい）」など、現在も息づいている文化遺産の多くは、ニシン交易によって江差へ伝わり、当時の生活に合う姿に変容し今日まで伝承されています。

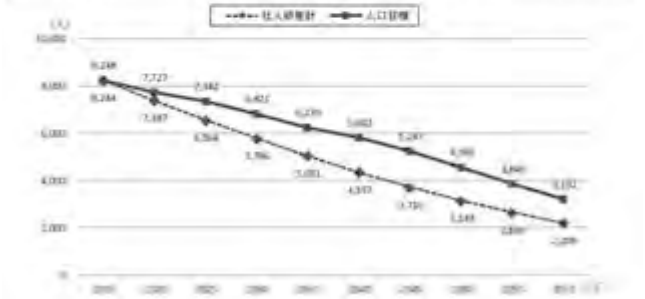
今年４年ぶりに開催された「姥神大神宮渡御祭」のようす

２　第２期江差町人口ビジョンの概要

江差町の人口の推移をみると、1970（昭和45）年の国勢調査人口は14,896人でしたが、2020（令和２）年は7,428人と、50年間で人口が約半減しています。高齢化率（令和２年）は38.3％と直近５年間で４％程度増加しています。国立社会保障人口問題研究所の推計によると令和42（2060）年の江差町の高齢化率は52.1％となっており、２人に１人が高齢者となる見込みです。自力で地域を維持することが困難になることが予想されることから、江差町出身者などＵＩＪターンの還流対策により、高齢化率を日本全体の39.9％と同等になるよう対策を講じながら、持続可能なまちを目指しています。

社人研推計と人口目標

（単位）	実績				推計								
	2010年（H22）	2015年（H27）	2020年（R2）	2021年（R3）	2025年（R7）	2030年（R12）	2035年（R17）	2040年（R22）	2045年（R27）	2050年（R32）	2055年（R37）	2060年（R42）
社人研推計（人）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
総人口目標（人）	[illegible]	[illegible]	9,004	8,244	7,727	7,342	6,831	6,238	5,802	5,247	4,560	3,846	3,192
高齢化率目標（%）	21.8	26.4	30.5	33.8	37.4	37.7	38.0	38.4	38.7	39.0	39.3	39.6	39.9



３　江差町まち・ひと・しごと創生総合戦略の概要

人口減少・少子高齢化が進行する中で、江差町が一定の人口規模で地域の活力を持続していくためには、第１期総合戦略の枠組みを継承しつつ、新たな視点やターゲットを検討しながら必要な施策を強化し、戦略的にまちづくりを進めていく必要があります。

基本構想のまちづくりの基本目標として、

（１）経済基盤を持続させる産業の振興
（２）あたたかなつながりのある地域・ひとづくり
（３）住民が元気に安心して暮らせる生活環境づくり
（４）住民とともにあり続ける行政運営

の達成に向け、重点的・分野横断的に取り組む目標として、３つの「重点目標」を掲げています。これは江差町が取り組んできたまち・ひと・しごと創生総合戦略を新たな５年間のあり方を検討したうえで、重点施策として計画に盛り込んでいます。重点目標に掲げた施策を優先的・重点的に実施することで計画全体の着実な推進を先導しています。

4　重点目標と具体的な施策

【重点目標１】江差ブランド製品づくりで仕事をつくる

町の活性化のためには、地域由来の第１次産業が元気であることが重要です。そのために、持続できる産業基盤を整備し、次世代の担い手が就業できる環境を構築する必要があります。６次産業化や地域ブランド展開に取り組み、産品の付加価値向上により地域以外の消費者に訴求するなど、江差らしい、江差ならではの産業振興を図ります。

（１）江差ブランド製品づくり
（２）地域資源の生産力強化
（３）経営安定化対策
（４）農林漁業体験メニュー等の構築

今年初出荷となった江差産トラウトサーモン（海面養殖）

【重点目標２】江差文化体験交流づくりで仕事をつくる

観光によるまちづくりは、歴史的・文化的資源が豊富な江差町にとって、地域外から収入を得ることができる重要な施策分野であるとともに、まちの魅力や課題を知ってもらい、交流人口だけでなく関係人口の拡大を図るための重要な要素と考えています。このため、一般社団法人北海道江差観光みらい機構を中核組織として、「日本遺産」や「日本で最も美しい村」である江差町の魅力を発信しながら、リピーターを増やす施策に加え、課題である通過型観光から滞在型観光への転換を目指した基盤整備に取り組みます。

北海道江差観光みらい機構が行っているマリンピング事業

（１）江差町版ＤＭＯの確立
（２）観光ブランド化の推進
（３）広域連携による取り組み
（４）受入環境等の整備

【重点目標３】江差っ子チャレンジ支援で仕事をつくる

産業振興や観光振興によって若者の仕事づくりや交流人口・関係人口の拡大を図る一方で、まちの居住環境の充実と魅力あるまちづくりを進め、移住・定住に繋（つな）げていく必要があります。このため、若者の創業・起業や就業支援、住宅整備に努めるなど、移住しやすい環境づくりを行います。また、幅広い世代との繋がりを生かした子育て支援やまちづくり、人材育成・コミュニティ活動を推進し、江差の地域特性に応じた最適な公共交通網の構築に取り組み、移住後も安心して住み続けられるまちづくりを進めます。

（１）若者チャレンジ支援
（２）若者等のＵＩＪターンを促進
（３）移住・定住対策（住環境整備等）
（４）子育て環境の充実
（５）関係人口の創出・拡大

５　取組事例　１

「新たな交通サービス　江差マース実証実験」

持続可能な利便性の高い交通体系の構築に向けた取り組みとして、江差町と官民連携による新たな地域創生の形「江差モデル」の構築を目指す包括連携協定を締結したサツドラホールディングス株式会社と連携し、路線バス中心の既存の公共交通を補完する新たな交通サービス「江差ＭａａＳ（マース）※」の本格運行を見据えています。

この事業が始まった背景には、江差町内の公共交通が路線バスとハイヤーに限定されている中で、路線バスについては自家用車の普及や人口減少等の影響により利用者数が減少傾向となっていること、ハイヤーについては限られた運行状況となっていることがあります。町内の高齢化が著しく進行し、高齢者を中心とする買い物や通院などの生活交通の充実化は喫緊（きっきん）の課題となっていることから、町内移動の利便性向上を図り、既存の公共交通を補完する、路線バスのように複数の人を乗り合いで運ぶことができる効率性と、ハイヤーのような利用者の要望に応じてドア・トゥ・ドアで運ぶことができる柔軟性を併せ持った「オンデマンド交通」の導入に向けた協議を進めています。

「江差マース」の本格運行を令和６年度に見据えている中で、町内を実証エリアとする実証実験を、令和３年度から４年度にかけて計３回実施しており、令和５年度においても、運賃の有償化や運行エリアの拡大などについて検証する実証実験の実施を予定しています。

【第１回実証実験】

町内の交通空白地域の一部を対象に経済エリアへの移動手段の確保を図ることを目的に、利用者からの予約に応じて自宅や乗降地点間を運行する乗り合い型の交通サービスである「オンデマンド交通」の無償実証運行を実施。

【第２回実証実験】

オンデマンド交通の運賃有償による地域の受容性等を検証することを目的に、１日乗り放題料金500円を適用した有償実証運行を実施。第１回実証実験から対象エリアを拡大し、据置型の予約タブレット端末の設置、アプリサービス機能及び会話形式による自動音声電話予約機能の追加を図りました。

【第３回実証実験】

江差町全域での「オンデマンド交通」の移動ニーズ等を把握することを目的に、無償実証運行を実施。第２回実証実験から対象エリアの拡大及びコールセンターでの電話予約サービスの追加を図りました。

【スマホ教室やＩＣＴ教室】

江差マースをより多くの町民の方に利用いただける環境づくりとして、スマホ教室を開催し、江差マースの利用方法（予約の仕方や乗車方法など）を周知しました。また、介護予防事業で実施しているＩＣＴ教室など、ＩＣＴに町民が触れる機会を創出していきます。

【目指す公共交通の姿】

江差マースは、町民が利用しやすい移動手段の一つとして、令和６年度からの本格運行を見据えていますが、江差マースを含め当町の目指す公共交通の姿は、町民や江差町に来訪する方の移動手段を将来にわたって確保していき、江差町に住み続けられる「まちづくりの装置」としていくことです。

そして、地域公共交通は誰かに与えられるものではなく、地域に居住する人、来訪する人などが積極的に利用する、すなわち、他人ごとではなく自分たちごととしてみんなで取り組んでいかなければなりません（みんなでつくる自分たちごとの交通）。

江差マース実証実験のようす

※　MaaS（マース）：「モビリティー・アズ・ア・サービス」の略称でバスやタクシーなど多様な交通手段をITやAIを組み合わせて連動させる次世代移動サービス。

６　取組事例　２

「大学連携事業～ニシンチャレンジカップ～」

少子高齢化、若者世代の流出、賑（にぎ）わいある市街地づくり、道路交通網の維持と再構築、インフラや公共施設の老朽化などの江差町の課題を解決するための一つの手法として「大学連携事業」を行っています。

その中でも北海道教育大学函館校とは、江差町の課題に対しさまざまな視点からアプローチをいただいています。主にコミュニティや町内外の人との繋がりの形成の場を意識し、町内の中心市街地に位置する法華寺通り商店街をフィールドに、ニシンチャレンジカップ（ＮＣＣ）を開催しています。

ＮＣＣは、2020年から始まり、今年で４回を迎えます。町内飲食店に協力を仰ぎ、新たなニシン料理を開発し、来場者に販売したり、法華寺通り商店街の街路をイルミネーションでライトアップし、海の中を演出したりとニシンに関連するコンテンツを模索しながら、商店街振興に取り組んでいます。

また、法華寺通り商店街だけでなく、江差町のイベント（かもめ島まつりやなべまつり）にブースを設け、ニシンをモチーフにしたオリジナルゲームを実施し、遊びながら地域のことを学ぶ機会を創出しています。子どもから大人まで幅広く参加できる企画や運営を大学生が自ら考え、実際にやってみる、という流れがこのＮＣＣ事業の中で展開され、少しずつニシンイベントが定着しつつあります。

ニシンチャレンジカップでのデジタル水族館のようす

「大学連携事業～地域づくり支援実習～」

北海道教育大学函館校との大学連携事業の一環として、令和５年度初めて「地域づくり支援実習」の受入を行いました。このインターンシップは、学生が観光や教育などに課題を抱える地域に一定期間滞在し、それらに関する就業体験を行うことによって、当該地域の振興に必要な実践的能力を育成する地域滞在型の取り組みです。

今回、「見えてる資源と見えない魅力」をテーマに、２名の大学１年生を迎え、北海道江差観光みらい機構にて学びながら、10日間の就業体験を実施しました。

支援実習の最後には２名の大学生の報告会が開催され、ＳＮＳの情報発信手法やＬＩＮＥを活用したクーポン発行などの取り組みの提案やツアーの体験メニューの提案、地域交流を盛んにすることで、まちが活気づき、外部から来た人にも地域の魅力が伝わり定住人口・関係人口の増加に繋がるとの報告がありました。今後も、大学生の支援実習が効果的に行われるよう連携に努めていきます。

かもめ島での支援実習（ＳＵＰ体験）のようす

７　おわりに

江差町はこれまで、総合計画やまち・ひと・しごと創生総合戦略を基に、町民が暮らしやすいまちづくりの実現に尽力してきましたが、人口減少や少子高齢化に歯止めがかからない状況です。総合戦略のスローガン「誇りある暮らしを未来へ紡ぎ、みんなでつくる自分たちごとのまちづくり　エエ町江差」を目指し、さまざまな対策を講じながら、そして連携を進めながら、地域活性化へ取り組んでいきます。